

ローマ、ビジョンを確立する - 第4

古い論争の再燃：アドベンチスト運動における預言解釈をめぐる攻防

Jeff Pippenger

2024-08-08

私たちは、「古い論争」が終わりの時代に再燃すると、前もって警告されてきた。

神の御言葉は、歴史と預言において、真理と誤りとの間に長く続いてきた闘いを描いている。その闘いはいまなお進行中である。かつてあったことは、繰り返されるであろう。古い論争は再燃し、新しい理論は絶えず生じてくるであろう。 Selected Messages, 第2巻, 109頁.

例外なく、あの古い論争は現代ローマの役割を弱体化させようとする悪魔的な企てであった。というのも、幻を確立するのは終末の教皇ローマだからである。アドベンチズムの歴史には、この事実を示す例がいくつもある。最初のものは、1843年のパイオニア図表に示された、プロテスタントとミラー派の間の論争であった。「主によって導かれ、変更すべきではない」とされる神聖な1843年のパイオニア図表において、神の言葉の預言的真理への直接の言及ではなかった唯一の記載は、当時のプロテスタントとミラー派の論争を図示した部分であった。プロテスタントはダニエル書11章14節の「あなたの民を略奪する者たち」をアンティオコス・エピファネスだと見なしたが、ミラー派はそれがローマであると知っていた。

164 アンティオコス・エピファネスの死。もちろん、彼は君たちの君に立ち向かったのではない。君たちの君が生まれるより164年も前にすでに死んでいたのだから。 1843
パイオニア・チャート

その後、ジェームズ・ホワイトとユライア・スミスの中で、ダニエル書11章における「北の王」の正しい同定をめぐる論争があった。ジェームズは、ダニエル書11章の最後の諸節に出てくる「北の王」を教皇ローマ、すなわち私の言うところの現代ローマと同定した点で正しかった。スミスは、ダニエル書11章36節の「北の王」は無神論のフランスだと主張した。

第36節 その王は自分の意のままに行い、自らを高め、すべての神々にまさって自分を大いなる者とし、神々の神に逆らって驚くべきことばを語り、憤りが成就するまで栄える。定められたことが行われるからである。

「ここで取り上げられている王は、直前に言及された権力、すなわち教皇権と同一の権力を指すことはできない。というのも、その権力に適用すると、諸条件が当てはまらないからである。」ユライア・スミス『ダニエル書と黙示録』292ページ

スミスは、「ここに登場する王は、直前に言及された同じ権力、すなわち教皇権を指すことはありえない。なぜなら、その権力に当てはめると諸条件が成り立たないからである」と述べることで、彼自身の「私的解釈」を持ち込んだ。神の言葉は決して失敗しない。この箇所の明確な文法構造を、人間の主張をもって打ち消すのは文法的に誤っている。そ

の節には「そして王は」とあり、そう書かれている以上、指されている王は直前の箇所に表示されている王と同一でなければならない。新たな王を示す証拠はなく、スミス自身、「直前に言及された同じ権力」とは「教皇権」であると断言している。彼は自著の中で、31節から35節までは教皇権についてであると認めており、36節で新たな王を特定する文法的根拠が何もないにもかかわらず、単に35節以降の諸節は教皇権の預言的特徴を示していないのだと主張する。ゆえに彼はフランスに関する自分の見解を挿入するのである。

スミスが四十節を扱うとき、彼が私的解釈によって築いた欠陥のある預言的土台が、彼に三つ巴の戦争を想定させる。彼の憶測では、南の王はエジプトと比定され、その節でフランスに対して「突きかかり」、またフランスに来る北の王をトルコと見なす。そうした人為的解釈の付加は、スミスが文字通りのハルマゲドンをも想定する預言モデルを構築し、その中ではトルコがエルサレムへ進軍し、ミカエルが立ち上がる時に人類の猶予期間の終わりが画されるとする。アドベンチズムの歴史においては、そのような適用の誤謬を正しく指摘した書物が多く著されてきた。

本稿の目的は、ユライア・スミスの私的解釈の帰結を論じるのではなく、彼がその私的解釈を広め始めたときに生じた論争を明らかにすることにある。というのも、ジェームズ・ホワイトが彼の誤った見解に反対したため、それはアドベンチズムにおける別の論争の筋となり、そこではローマの正しい特定が誤った適用によって攻撃されたからである。

また、ラオデキヤ的アドベンチズムが、ダニエル書の「the daily」をキリストの聖所奉仕と同一視する背教的プロテスタントの見解を採用したとき、ダニエル書の「the daily」をめぐる長引いた論争もあったが、これは「the daily」は異教ローマの象徴であるという確立された基礎的真理に反していた。

それから私は、「daily」（ダニエル8:12）に関して、「sacrifice」という語は人間の知恵によって付加されたもので本文には属さず、主はその正しい見解を「裁きの時の叫び」を告げた者たちにお与えになった、ということを見た。一致が存在していた1844年以前には、ほとんどすべての人々が「daily」の正しい見解で一致していたが、1844年以降の混乱の中で他の見解が受け入れられ、闇と混乱が後に続いた。時は1844年以来試験ではなく、今後二度と試験となることはない。『初期の著作』、74頁。

終わりの時にあたる1989年、ダニエル書11章の最後の六節の封印が解かれたとき、「北の王」は教皇ローマであると認識された。これは、かつてジェームズ・ホワイトがユライア・スミスとの論争の中で指摘したとおりであった。ホワイトは、スミスの誤謬に対処するにあたり、「line upon line」の方法論を適用した。ホワイトは、ダニエル書2章で最後に表されている勢力、同7章で最後に表されている勢力、同8章で最後に表されている勢力がいずれもローマであるなら、三つの証言に基づいて、ダニエル書11章でその終わりに至る勢力もローマであり、スミスが主張するトルコではない、と論じた。

1989年に始まった第三天使の預言運動は、2001年9月11日の直後、ヨエル書1章をめぐる論争に直面した。最初の五節の中で、まず世代に関するもの、次に昆虫に関するものという二人の証人が、ローマによってアドベント主義にもたらされた漸進的破壊を指し示している。イザヤによれば、預言における「酔いどれ」とは「エルサレムを治める嘲る者た

ち」である。彼らが目覚めるのは、第四の、そして最後の世代である。その漸進的破壊は霊的破壊である。なぜなら、それは終わりの時のエルサレムに向けられているからであり、また1863年の反逆以降、ラオデキアのセブンスデー・アドベンチストたちはローマの教義に次第に染まっていったからである。

ペトエルの子ヨエルに臨んだ主の言葉。これを聞け、長老たちよ。地に住むすべての者よ、耳を傾けよ。あなたがたの日に、またあなたがたの父祖の日に、こんなことがあったか。これをあなたがたの子どもたちに語れ。あなたがたの子どもたちはその子どもたちに、その子どもたちは別の世代に語れ。毛虫の残したものを、いなごが食い、いなごの残したものを、シャクトリムシが食い、シャクトリムシの残したものを、いもむしが食った。酔いどれどもよ、目を覚まして、泣け。すべてのぶどう酒を飲む者よ、号泣せよ。新しいぶどう酒のゆえに。それはあなたがたの口から断たれたからだ。ヨエル書 1:1-5。

ニューヨーク市の大きな建物が倒壊した後、「後の雨」が「ぱらつき」始めたこと、そしてミラー派の歴史の中で成就したハバクク書2章の論争が再び進行していることが、理解された。その論争は、正しい預言的手法をめぐるものだった。

私は見張り所に立ち、物見の塔に身を置き、主が私に何を語られるか、また私が叱責を受けるとき何と答えるべきかを見張ろう。主は私に答えて言われた。「幻を書き記し、板に明確にしるせ。読む者が走りながらでも読めるように。その幻はなお定められた時のためであり、終わりに向かって告げられ、偽りはない。遅れるように見えても、それを待て。必ず来る。遅れることはない。見よ、高ぶる者の魂は彼のうちにまっすぐではない。しかし、義人はその信仰によって生きる。さらに、彼は酒によって背き、高慢で、家にとどまらない。彼の欲望はよみのように広がり、死のようで、満ち足りることがなく、あらゆる国々を自分のもとに集め、すべての民をかき集める。」ハバクク書 2:1-5。

ハバクク書2章の試練は、2001年9月11日に黙示録18章の力ある御使いが降臨したときに始まった、十四万四千人の運動の試練を予表していた。ついで、1843年の先駆者図表に示されているアドベンチズムの基礎の上に立つ者たちと、ハバクク書において「酒によって」背き、ヨエル書の「酔いどれども」であってその後「目を覚ました」ものの、「新しいぶどう酒」は彼らの「口」から断たれてしまった者たちとの間で、論争が始まった。

一節にあるヘブライ語の「reproved」は「argued with」を意味する。ミラー派の見張り人に与えられたその論証は、これらの節の成就として1842年5月に作成された「1843年パイオニア・チャート」上に表現されていた。信仰によって生きる一方の階層は、その時期の預言的な現在の真理のメッセージをめぐる、ぶどう酒によって背いたもう一方の階層と論争状態にあった。彼らこそ、教理の象徴であるぶどう酒が自分たちの口から断たれていることに目覚める、ヨエルの酔漢たちである。彼らはまた、エルサレムを支配し、封じられた書を理解できない、イザヤのいうエフライムの酔漢たちでもある。

ああ、エフライムの酔いどれどもの誇りの冠に災いあれ。彼らの栄華はしおれゆく花のようで、酒に飲まれた者たちの肥えた谷の頂にある。見よ、主は力強く強い者を備えておられる。その者は雹の嵐、滅ぼす暴風のように、あふれかえる大水の洪水のように、手で地に投げ倒す。誇りの冠、すなわちエフライムの酔いどれどもは、足の下

に踏みにじられる。…立ち止まって驚け、叫べ、また叫べ。彼らは酔っているが、酒によってではない。よろめいているが、濃い酒によってではない。…それゆえ、エルサレムにいるこの民を治めるあざける者たちよ、主のことばを聞け。主はあなたがたの上に深い眠りの霊を注ぎ、あなたがたの目を閉じられた。預言者と、あなたがたのつかさたち、すなわち先見者たちを覆われた。こうして、すべての幻はあなたがたには封印された書物の言葉のようになった。人々が学のある者にそれを渡して「どうかこれを読んでください」と言うと、彼は「読めない。封印されているからだ」と言い、またその書を学のない者に渡して「どうかこれを読んでください」と言うと、彼は「私は学がない」と言う。イザヤ書 28:1-3、14:29:9-12。

ハバクク書に描かれる、エフライムの酔いどれたちと神の預言のことばを信仰によって歩む者たちとの論争は、イザヤの証言において、正しい方法論と誤った方法論をめぐる争いであると具体的に特定されている。というのも、酔いどれたちをつまずかせ、死の契約を結ばせるのは「line upon line」という方法論だとイザヤが指摘しているからである。

しかし彼らもまた、ぶどう酒によって迷い、濃い酒によって道を踏み外した。祭司も預言者も濃い酒によって迷い、ぶどう酒に呑み込まれ、濃い酒によって道を踏み外した。彼らは幻において誤り、裁きにおいてつまずく。すべての食卓は嘔吐と汚穢で満ち、清いところがない。誰に知識を教えるのか。誰に教えを悟らせるのか。乳から離され、乳房から引き離された者たちに。なぜなら、戒めに戒め、戒めに戒め、規則に規則、規則に規則、ここに少し、そこに少し、だからである。なぜなら、どもる唇と異なる言葉をもって、彼はこの民に語られるからである。彼は彼らに言われた、「これが、あなたがたが疲れた者を休ませる休みであり、これが憩いである。」しかし、彼らは聞こうとしなかった。こうして、主の言葉は彼らにとって、「戒めに戒め、戒めに戒め、規則に規則、規則に規則、ここに少し、そこに少し」となり、彼らが行って、うしろに倒れ、砕かれ、罠にかかり、捕らえられるためである。それゆえ、エルサレムにいるこの民を治める、あざける者たちよ、主の言葉を聞け。あなたがたがこう言ったからだ。「われらは死と契約を結び、陰府と協定を結んだ。あふれ流れる鞭が通り過ぎてても、それはわれらに及ばない。偽りをわれらの避け所とし、虚偽の下に身を隠したからだ。」イザヤ書 28:7-15

次にイザヤは、神がハバククの論争の中に置かれたもので、酒に酔う者たちに裁きをもたらすものが何であることを示している。それは礎石、すなわちレビ記二十六章の「七つの時」であり、ガブリエルと天使たちがウィリアム・ミラーに理解させた最初の時の預言であった。

それゆえ、主なる神はこう言われる。見よ、わたしはシオンに礎として一つの石、試みられた石、尊い隅のかなめ石、確かな礎を据える。信じる者は慌てることがない。わたしはまた、裁きを測り縄とし、義を下げ振りとする。雹は偽りの避け所を掃き去り、水は隠れ場を押し流す。あなたがたの死との契約は取り消され、よみとの協定は立たない。あふれ流れるむちが通り過ぎるとき、あなたがたはそれによって踏みにじられる。イザヤ書 28:16-18。

2001年9月11日を起点として、主がご自分の民を古き道に立ち返らせてくださった直後、その運動に参加していた一つのグループが、ヨエルの四匹の虫は第三のわざわいのイスラムを表していると断定した。最後の世代の神の民に「line upon line」という方法論が開かれたとき、重要な預言の規則が認識された。その規則とは預言の三重適用であり、ヨエルの四つの世代が第三のわざわいのイスラムを表すと断定したそのグループは、その誤った適用を正当化するために、この預言の三重適用の規則を誤用した。

そして2014年の時期に、イギリスおよびオーストラリア発の同性愛の「woke」アジェンダとともに、サタンがこの運動の中に入り込むことを許された。その攻撃は、ダニエル書11章1節から15節に示された歴史の誤った解釈に基づいていた。この運動に潜入して攻撃した同性愛擁護の指導者たちは最終的に、アドベンチズムは、反キリストであるローマの教皇に対して虚偽の非難をしてきたとして、ローマの教皇に謝罪すべきだと主張した。この攻撃の目的は、この運動を潰すことであり、とりわけ、まさに「あなたの民の略奪者たち」が特定されている箇所（ダニエル書11章1-15節）について混乱を生じさせることにあった。

これらすべての論争は、サタンが教皇ローマの象徴を混乱させようとする試みであった。史上最も賢い人物によれば、太陽の下に新しいものは何もない。今日、その論争は再び「あなたの民を略奪する者たち」と象徴されるローマの特定をめぐるものとなっている。新しい私的な解釈は、「あなたの民を略奪する者たち」はアメリカ合衆国だと主張しており、そう主張することで、これがミラー派とプロテスタントのあいだで最初に起きた論争とまったく同じ争点であることに、彼らは明らかに気づいていない。さらに、16世紀の作家ジョン・ヘイウッドに帰せられる古い言い回しに「見ようとしぬ者ほど盲目な者はいない」というものがある。その語句の別の変種は「聞こうとしぬ者ほど耳の聞こえない者はいない」である。おそらくほとんどの人は、この言い回しがヘイウッドに帰せられていることを知らず、また、ヘイウッドのこの句が、エレミヤ書やイザヤ書、そして新約聖書でイエスによって引用された箇所など、聖書の記述に由来することも理解していない。

愚かで悟りのない民よ、今これを聞け。目があっても見ず、耳があっても聞かない。エレミヤ書 5:21

ダニエル書の「悪しき者」とマタイの「愚かな乙女たち」は、「知識の増加」を理解しない。1989年の「知識の増加」とは、主として、ダニエル書11章の最後の六節が、教皇権（私の言い方では「現代ローマ」）の最終的な興隆と没落を指し示していると認識されたことを指す。これらの節はアメリカ合衆国も指し示しているが、それはアメリカ合衆国と教皇権との関係に限られる。「悪しき者」と「愚か者」は「賢い者」と対比され、終わりの時代の賢い者は1989年の「知識の増加」を理解している。「愚か者」とは、目があっても見ず、耳があっても聞かない者たちのことである。

また、私は主の声を聞いた。「わたしは誰を遣わそうか。誰がわれわれのために行くだろうか」と。私は言った、「ここにわたしがいます。わたしをお遣わしてください」。すると主は言われた。「行って、この民に告げよ、『聞けども悟らず、見れどもわからない』と。この民の心を鈍くし、その耳を重くし、その目を閉ざせ。彼らとその目で見、その耳で聞き、心で悟って立ち返り、いやされることのないように。」イザヤ書

6章8-10節

イザヤ書6章で語りかけられているのは、2001年9月11日に到来した「現在の真理」のメッセージの中にと自称する人々である。というのも、イザヤ書6章は、その場面が「全地は主の栄光で満ちている」ときに起こることを示しているからである。ニューヨーク市の巨大な建物が、神がひとたび触れられただけで打ち倒されたとき、黙示録18章の天使が下り、地は神の栄光で輝いた。

王ウジヤの死んだ年に、私は主が高くあげられた御座に座しておられ、その衣の裾が神殿に満ちているのを見た。その上にはセラフィムが立っていた。彼らはそれぞれ六つの翼を持ち、二つで顔を覆い、二つで足を覆い、二つで飛んでいた。彼らは互いに呼び交わして言った。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主。全地はその栄光で満ちている。」叫ぶ者の声によって戸口の柱が揺れ動き、神殿は煙で満ちた。イザヤ書6章1-4節。

ホワイト夫人は、天使の宣言を、黙示録18章の天使がその栄光で全地を満たす時を画する出来事と結びつけている。

神がご自分の民へのメッセージを携えてイザヤを遣わそうとされたとき、まず預言者に、聖所のうちの至聖所を幻のうちにのぞき見ることを許された。にわかには、神殿の門と内垂れ幕が引き上げられ、あるいは取りのけられたかのように見え、彼には、預言者の足さえ踏み入れることのできない至聖所の内を見つめることが許された。そこには、高くあげられた御座に着いておられるエホバの幻が彼の前に現れ、その栄光の衣の裾が神殿に満ちていた。御座の周りには、大いなる王の護衛のようにセラフィムがいて、彼らは自分たちを取り囲む栄光を映し出していた。彼らの賛美の歌が深い崇敬の調べで響き渡ると、門の柱は地震に揺さぶられたかのように震えた。罪に汚されていない唇で、これらの天使は神への賛美をほとばしらせた。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主」と彼らは叫んだ。「全地はその栄光で満ちている。」 [イザヤ書6:1-8参照。]

御座の周りにはいるセラフィムは、神の栄光を仰ぎ見て畏敬の念に満たされ、ひとときたりとも自らを賞賛のまなざしで見ることはない。彼らの賛美は万軍の主に向けられている。やがて全地がその栄光で満たされる時を見渡しつつ、勝利の歌は美しい詠唱となって互いに呼応しながら響き渡る。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主」。Gospel Workers, 21.

2001年9月11日に始まった封印の時において神の民を代表するイザヤには、目がありながら見ようとせず、耳がありながら聞こうとしない民に携えるべきメッセージが与えられた。アルファでありオメガであるイエスは、始まりをもって十四万四千人の封印の時の終わりを示しておられる。終わりには再び、イザヤに象徴される使者が現れ、見ないこと、聞かないことを選ぶ民にメッセージを携える。そのメッセージは、十四万四千人の最終的なふるい分けをもたらす。そのメッセージとは、神の預言的な証しからもたらされる真理の言葉である。その預言的な証しは、「あなたの民を略奪する者」として象徴される力によって確立される「幻」である。

次の記事では、これらの論争それぞれを取り上げ、線に線を重ねる形で互いに重ね合わせます。ミラライトの線、スミスとホワイトの線、「daily」の線、1989年の「北の王」の線、ヨエルの虫の線、そして現在の論争。六つの古い論争は、線に線を重ねて見ると、1843年のパイオニア・チャートに示されている最初の論争の真理を明確に支持していることがはっきりと分かります。その真理とは、ローマこそ『あなたの民を略奪する者』であり、自らを高め、倒れ、そして幻を確立する者である、ということです。

私は、1843年の図表が主の御手によって導かれ、変更してはならないこと、また、数字は主が望まれたとおりであったこと、さらに、御手がその上を覆っていくつかの数字の中にある一つの誤りを隠し、御手が取り去られるまで誰にもそれが見えなかったことを見た。『初期の著作』74頁。

その図表に記されている真理を退けることは、同時に「預言の霊」の権威を退けることでもある。そしてその図表は、「幻」を打ち立てるのはアメリカ合衆国ではなくローマであると示している。その「幻」こそ、ソロモンが私たちに、その「幻」がなければ神の民は滅びると教えている、まさにその「幻」である。

サタンは…偽りを絶えず持ち込み、真理から引き離そうとする。サタンの最後の欺きは、神の御霊の証しを無きものにするのである。「幻がなければ、民は滅びる」（箴言29:18）。サタンは、さまざまな方法で、またさまざまな手先を用いて巧妙に働き、神の残りの民が真の証しに寄せる信頼を揺るがそうとする。

証言に対してサタンの憎しみがかき立てられるだろう。サタンの働きは、諸教会がそれらに寄せる信頼を揺るがすことに向けられる。その理由はこうである。もし神の御霊の警告と叱責と勧告に耳が傾けられるなら、サタンは自分の欺きが入り込み、人々の魂をその惑わしで縛り上げるための、これほど明確な足場を得ることはできないからである。『選ばれたメッセージ』第1巻、48頁。

表面に現れたことの背後を見通し、すべての人の心を読み取る方は、大いなる光を受けた者たちについてこう言われる。「彼らは自らの道徳的・霊的状态のゆえに悩み苦しむ、驚いているのではない。まことに、彼らは自分自身の道を選び、その魂は彼らの忌むべき行いを喜んでいる。わたしもまた彼らの惑いを選び、彼らにその恐れを臨ませる。わたしが呼んだとき、答える者はひとりもおらず、わたしが語ったとき、彼らは聞かなかった。しかし、彼らはわたしの目の前で悪を行い、わたしの喜ばないことを選んだ。」

「神は彼らに強い惑わしを送り、彼らが偽りを信じるようにされる。」

「彼らが救われるために真理への愛を受け入れなかったからである。」

「しかし、不義を喜んだ。」

イザヤ書66:3、4; テサロニケ人への第二の手紙2:11、10、12。

天の教師は問いかけた。「実際には世の方策に従って多くの事柄を取り計らい、エホバに対して罪を犯しているのに、正しい土台の上に建てており、神があなたの行いを受け入れておられるという見せかけにまさる、心を惑わす強い迷いがほかにあるだろうか。ああ、なんと大いなる欺き、魅惑的な迷妄であることか。かつて真理を知った者たちが、敬虔のかたちをその霊と力と取り違え、自分は富み、財を増し、何一つ必要がないと思い込みながら、実のところはすべてを必要としているとき、その迷いは人

の心をとらえてしまうのだ。」『証言』第8巻、249、250頁.